

巻頭言

恋も試験も,,,,,

みやぎ

宮木さえみ

(メディアセンター本部事務長)



冒頭から私事で恐縮であるが、8年ぶりに塾内の他の部署からメディアセンターに戻ってきた。この間、一利用者として外からメディアセンターを見、時にはスタッフと話をすることもあり、メディアセンターを取り巻く環境の変化やメディアセンター自身の変貌については、多少なりとも理解しているつもりでいた。しかし、実際にメディアセンターで業務に携わるようになると、この変化・変貌は想像以上のものであることを実感する毎日である。

変化の第一は、電子化の進展である。8年前にはオンライン・データベースのサービスはかなり広まっていたが、まだCD-ROMなども活躍していた。現在では、医学や理工学の分野のコア・ジャーナルはほぼ電子ジャーナルとなり、社会科学や人文科学分野においても、電子ジャーナル化が進んでいる。慶應義塾大学が所蔵している貴重な資料を電子化して、世の中に発信することも開始されており、なんとあのGoogleとの提携プロジェクトも行われているのである。慶應義塾大学内で生産される学術情報をメディアセンターがとりまとめて発信する機関リポジトリ(KOARA)のサービスも充実してきており、従来の「研究途上における学術情報サービス」にとどまらず、「研究成果の発信」においてもメディアセンターが重要な役割を担うようになっている。

これらの変化は、当然、サービスの形態にも影響を与えており、今や、自宅や研究室から電子資源にアクセスできることが当たり前となり、本を借りた場合の延長手続きなどもメディアセンターまで出向かなくても可能になっている。

メディアセンタースタッフの業務形態にも、大きな変化が生じている。8年前は夜間のカウンターなど一部の業務に取り入れていた業務委託が、現在では、ほぼ全メディアセンターの閲覧業務とメディアセンター本部の受入・目録業務の大半にまで広がっている。これらのサービスを支えるコンピュータ・

システムの維持管理にあたるスタッフの重要性も、これまで以上に増している。

さらに、否応なしに国際化・グローバル化が進んでいる。利用者の多様化・国際化という側面も大きい。業務の面にも表れている。例えば、メディアセンターの各種のサービスを支える現在のコンピュータ・システムは、アジアを含めて世界中の多くの学術図書館が使用している国際標準のものである。また、メディアセンターは、北米を中心とした研究図書館の集まりである、OCLC Research Library Partnershipに加盟していて、海外の図書館情勢や新しいサービスの動きなどを取り入れている。カナダのトロント大学図書館や韓国の延世大学図書館とも協力協定を締結し、職員の交流を行っている。

このような急速な変化・変貌の只中であって、メディアセンターは、一体、どのような方向に進んでいけばよいのだろうか？これまでの本誌の巻頭言の中で、何人かの方々が異口同音に、「メディアセンターは学問との出会いの場」であり、「知的土壌」であり、電子化の進展やサービス形態の変化の中でもその基本精神を忘れてはならない旨を述べておられる。つまり、時代や資料の形態やサービスが変わっても、「新たな知との出会い」を提供していくことが基本使命であり、これをどのように実現していくかを日々、問いながら、業務を遂行していくことが肝要なのであろう。

義塾卒業の歌人、吉野秀雄の「図書館の前に沈丁花さくころは恋も試験も苦しかりにき」の時代と同様、これからもメディアセンターを「人に対する恋」も「学問に対する恋」も提供できるところにしたいと思う。